

子どもの動きの評価法に関する基礎的研究 —ダンスセラピーにおける Kestenberg Movement Profile を手がかりにして—

崎 山 ゆかり
(武庫川女子大学文学部教育学科)

A pilot study of evaluation of children's movement — Through Kestenberg Movement Profile in Dance/Movement Therapy —

Yukari Sakiyama

*Department of Education, School of Letters
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663-8558, Japan*

Abstract

There is not a popular movement evaluation method of active play of children in Japan. Actually some methods for specialists have already existed, however they are difficult for normal child care workers. This pilot study tries to clarify the basic element of analyzing children's movement by referring to Kestenberg Movement Profile (KMP) which is popular in dance/movement therapy in the United States. This profile mainly consists of the two systems and is concerned with children's psychological aspect. To understand the theoretical aspect of KMP, we have to study Darwin, Laban Movement Analysis and child psychiatry. Although child care workers have no time to study such complicate theories, some methods to understand children's movement and the meaning of it from objective point of view are required. So this is why we should refer the existing popular method and try to find the way of application. Through taking a general view from KMP and focusing Tension-Flow Effort System, the natural flow movement is estimated as a key movement which we should pay attention.

1. はじめに

子どもの体力の低下が問題となって久しい昨今、保育現場での運動の必要性がますます高まっている。乳幼児期の運動遊びは、子どもの心身の発育発達に大きく寄与するものであるが、その評価をどのように行うのかまたは行う必要はないのか、多様な考え方があろう。筆者の専門領域である心理療法の手段として動きを用いるダンスセラピーにおいては、セラピストが対象者の動きの意味を知り、幅広い動きによる関係性をつなぐためにも、動きの評価に関する知識は不可欠とされている^{註1)}。

保育や体育の学問領域においても、2000年以降日本幼児体育学会や日本発育発達学会等が組織され、子どもと運動のあり方の更なる検討が進んでいる。また2008年には日本学術会議主催の「乳幼児期から発育期の子どもの身体活動・スポーツガイドライン策定に向けて—」というテーマでシンポジウムが開催^{註2)}され、科学的根拠を有した身体活動量や運動内容の提示についての議論を通じ、同年8月には提言書がまとめられている。

言うまでもなく、子どもにとっての運動は身体のみならず広く心にも影響を及ぼすものである。現在幼児体育の領域で運動遊びの創案や展開を行う中、これらの動きの相互交流により子どもたちの心身両面にどのような影響をもたらすのかということを知りうる客観的視点の必要性を、筆者は認識するようになった。そこで子どもに対するダンスセラピーの領域で用いられている評価法を元に、保育現場で活

用できる動きの評価法を開発の可能性を検討することとした。

これまで子どもへのダンスセラピーにおける評価については、発達心理学的観点から独自の運動分析法が Loman や Kestenberg^{1) 2) 3)}らによって理論的研究がなされてきた。とりわけ、Kestenberg が中心となり作成された Kestenberg Movement Profile (KMP)⁴⁾は、特に子どもを対象としたダンスセラピーにおいてその評価法の中心的役割を果たしている。本研究では、ダンスセラピーで用いられる動きの評価法を概観した上でこの KMP に焦点を当て、その理論的背景の理解に努めていく。KMP 理論を知るための前提条件などを探りながら、子どもの動きの評価法開発につながる理論面での基礎資料を得ることを目的とし、以下に検討を行うこととする。

2. 欧米のダンスセラピー等における動きの評価法

動きを心理療法的に用いるダンスセラピーにおいては、アメリカで始まった 1940 年代頃より動きの評価の必要性が求められてきた。1966 年に設立されたアメリカダンスセラピー協会(American Dance Therapy Association)の初代会長の Chace は、精神病患者とその動きの関連性に着目し、動きの特徴の理解に努めていた⁵⁾とされる。またダンスセラピーにおいては、グループ内の相互交流を活用した手法も多く、他者間での動きの分析方法などの検討^{6) 7)}も試みられてきた。個人の動きの分析や評価、ひいては診断に至る技法は多種多様であり、その概要を Table 1 にまとめた。

大きな特徴としてあげられるのは、どの動きを評価するのかという評価対象について、個人の動きそのものの特性を切り出して評価するものと、セッション全体の時間の流れの中で全体評価するものに分けられていることである。また、通常のセッションにおける動きを分析対象とするものから、セラピストが具体的な動きの指示を出し、対応するクライアントの動きそのものを評価対象とするものもあった。さらに、具体的な評価方法としては、項目ごとに段階点が設けられた加算式の得点評価や項目ごとにセラピストがコメントを記すものもあった。分析や評価、診断の技法が臨床場面で活用しやすい汎用性があるものから、分析項目が多岐にわたりあくまでも研究対象としての動きの分析技法に過ぎないものもみられる。いずれにせよ、これら Table 1 に掲げた評価法は、子どもを対象としたダンスセラピーにおいては、多用されるものはない。一方日本のダンスセラピーにおいては、動きの評価技法そのものが独自には存在せず、検討課題として指摘されるものの、クライアント自身の振り返りを目的とした自己評価の試み^{8) 9)}がなされているに過ぎないのが現状である。

このような状況において、Kestenberg Movement Profile は傑出した発展を遂げ、現在子どもの動きの評価方法として幅広く認識されており、検討対象として最もふさわしい分析技法であると位置付けられよう。

Table 1. 欧米のダンスセラピーにおける動きの分析・評価・診断技法の概要

技法名	作成者・発表年	特徴
Davis Movement Diagnostic Scale	Davis, M. 1968	身体、空間、エフォート、動きの歪みの 4 部門から成り、部門ごとに分析項目が規定され、主に 0～2 点の 3 段階の得点評価を行う
Movement Diagnostic Test	Espenak, L. 1970	具体的な課題動作を 7 つ定め、各動きの観察点を示し、動きごとに評価し合計得点を算出する(1982 一部改変)
Nonverbal Assessment of Family system	Dulicai, D. 1977	個人の動きにおける他者との関係性に着目し、動きの協調性などを分析項目にしている
Maladaptive Behavior Dance/Movement Therapy Evaluation Form	Bernstein, P. L. 1979	12 要因 216 項目の観察点を規定し、極めて細やかな動きまで分析対象としているが、臨床においては実用的でない
The Action Profile System of Movement assessment for self development	Ramsen, P. 1992	自我の発達といった心理的側面を重視した動きの評価法
The Movement Psychodiagnostic Inventory	Cruz, R. F. 1995	動きの中にみられる精神的な病理に着目した分析技法であるが、実用的ではない

* 表の作成にあたっては、崎山¹⁰⁾の文献を参考にし、グループ対象の技法を除いて再構成した。

3. Kestenberg Movement Profile の概要

Kestenberg Movement Profile (KMP)とは、児童精神科医であったケステンバーグが、動きの分析家やダンサーや医師など研究者の集まりである研究グループ(the Sands Point Movement Study Group)の継続的な取り組みの中で生まれた子どもの動きの評価法である。ダンスセラピーを学ぶ上で不可欠な“ツール”としても広く認識されており¹¹⁾、前述したようにダンスセラピストの養成課程で学ぶことになっている。

子どもの動きを分析するという意味では、まず子どもの発達段階に応じて獲得していく基本動作を基盤としている。それらの動きに児童精神分析的視点を取り入れ、動きの意味づけを行った。乳児が生きるために必要な飲む、食べるなどの基本的欲求、さらに歩く、走る、跳ぶなどの基本的移動動作など段階的に獲得する運動機能に見られる筋活動の中に、子どもの欲求を見いだした。

具体的な分析の視点となる項目の概要は、主に2つの主要な動きを分析する視点から構築されており、それぞれ「システム1」「システム2」と区分されている。

(1) テンションフローエフォートシステム(システム1)

システム1はテンションフローエフォートシステムと称される。テンションフローとは、筋緊張の流れの変化として定義され、筋の収縮や弛緩の幅をフリーフローとバウンドフロー（滑らかな流れとごちこちない流れ）で示される。またこのいずれにも属さない中立的すなわちニュートラルとされるテンションフローも存在している。その概要を次のTable 2にまとめた。

テンションフローリズムでは、子どもの発育発達上見受けられる筋の緊張と弛緩の動きとして、誕生時から6歳頃までの発育段階に応じた10の動きが示されている。テンションフローアトリビュートでは、筋緊張のしなやかさや弾力性および順応性が示されており、フローの対照的な3対の動きが示されている。プレキュサースオブエフォートでは、エフォートしての動きを連想させるような動きの始まりをプレエフォートとして、3対の動きが示されている。エフォートでは、フロー以外の3要素の対照的な動きが示されている。

Table 2. KMP テンションフローエフォートシステム(システム1)

名称	意味	動きの内容	
Tension Flow Rhythm 緊張の流れのリズム	欲求	誕生から1歳 ～2歳 ～3歳 ～4歳 ～6歳	乳を吸う⇔噛み付く／嘔む 捻る⇔緊張する／弛緩する 走る／漂う⇔始める／止まる 揺れる⇔押し寄せる／生まれる 跳ぶ⇔力走する／激突する
Tension Flow Attributes 緊張の流れの属性	感情や気質		フローの調整⇔平坦なフロー 低い感情の起伏⇔高い感情の起伏 漸進性⇔突発性
Precursors of Effort エフォートの前兆	防衛		柔軟性⇔チャネリング 優しさ⇔激しさ／緊張 躊躇⇔不意
Effort エフォート	計略への対処	空間 力性 時間	散漫⇔集中 軽さ⇔重たさ 減速⇔加速

(2) シェイプフローエフォートシステム(システム2)

システム2はシェイプフローエフォートシステムと称される。シェイプフローとは、3次元での身体の位置関係を示し、シェイプの変化の継続性として定義されている。シェイプフローにおいても、テンションフローと同様に対の動きから成り立っており、それぞれの動きが子どもと空間または空間内の他

者との関係性を意味するとされている。その概要を Table 3 にまとめた。

バイポーラーシェイプフローでは、空間における身体の位置づけが感情の表れであることを示しており、3つの対照的な動きを示している。ユニポーラーシェイプフローでは、動きの方向性を取り上げ、動きによって示された方向が外界への刺激に対する反応であることを示している。シェイプフローデザインでは、空間内を移動する際の軌跡に焦点を当て、動きの流れの特性により、空間の使い方を示している。シェイピングインディレクションでは、身体の動きそのものがどのような方向性を持って形づくられているかを示している。シェイピングインプレーンでは、前後左右上下の動きにより、同一空間内

Table 3. KMP シェイプフローエフォートシステム(システム 2)

名称	内容	動き
Bipolar Shape Flow 両極性 シェイプの流れ	自己感情	広がっている⇔狭まっている 長くなっている⇔短くなっている でっぱっている⇔くぼんでいる
Unipolar Shape Flow 単極性 シェイプの流れ	外界刺激への反応	側面が幅広い⇔放射状に狭い 頭部に向かって⇔尾部に向かって 前面の⇔後面の
Shape Flow Design シェイプの流れの デザイン	空間の使用	環状の⇔直線状の 低い振幅⇔高い振幅 丸みのある反転⇔とがった反転
Shaping in Directions 方向性における シェイピング	方向性のある動きの使用	両脇⇔横断 上方⇔下方 前方⇔後方
Shaping in Planes 前後左右上下面 におけるシェイピング	他者との複雑な関係性	広がって⇔狭まって 上昇して⇔下降して 前進して⇔後退して

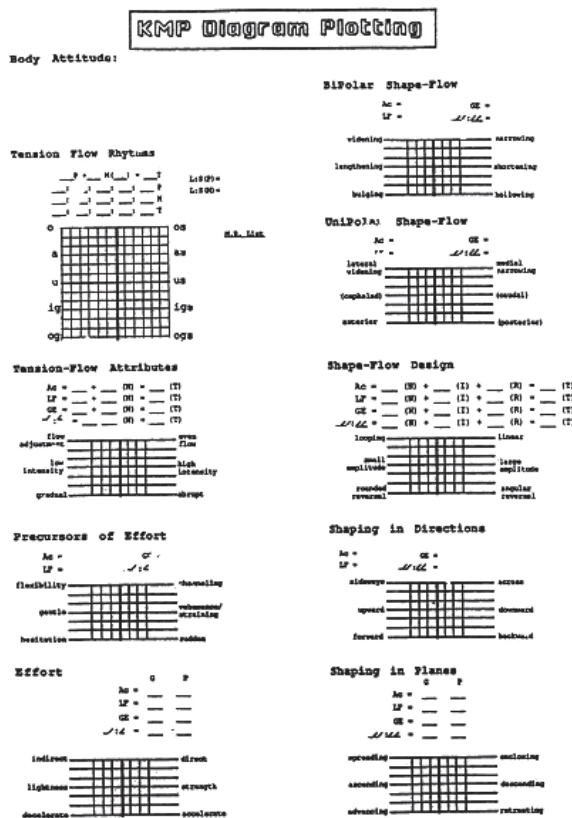


Figure 1. KMP グラフ記入表

で他者とどのようなかわりを持っているのかを示している。

KMPはこのような2つのシステムから成る動きの分析項目をふまえ、観察された子どもの動きの特性をグラフ化することにより、動きの特性を見いだそうとするものである。さらに対となる動きの割合を数値化する工夫もなされている。グラフについては、その例を文献¹¹⁾より Figure 1 として転載した。

4. Kestenber Movement Profile 理解のための前提条件

前節で示した KMP は、Laban の運動分析理論^{12) 13)}などを基盤にして成り立っており、運動の質を意味するエフォート、その4要素である力性(Weight)、空間(Space)、時間(Time)、流れ(Flow)などの理解を前提としている。またこれら4要素から成るエフォートは、攻撃的(fighting)か服従的(indulging)かに二分されるところから論が始まっている。欧米のダンスセラピストが、その養成課程で運動分析を学び、さらに運動分析の専門家としての資格(Certified Movement Analyst CMA)を有するものも多い。しかし、日本では Laban の名は知られていても、舞踊の専門家においてもその理論が十分に理解されているとは言いがたい現状がある。Laban の研究者である大貫¹⁴⁾は、Laban の理論が進化論で知られる Darwin の業績を「隠し味」にして発展してきたことを指摘している。そして「ラバンの理論は理解するのではなく、ああこういうものかと『了解』する」¹⁵⁾ことの重要性を述べている。つまり、KMP を理解するために求められる前提条件として、こうした Darwin と Laban の考え方にふれる必要性が挙げられる。

しかしながら、彼らの理論は実に幅広く、その基本的理解を行おうとすると膨大な時間が必要となる。本研究の当初の目的である「子どもの動きの評価法開発につながる理論面での基礎資料を得る」ためには、その中から一部の理論のみを切り取らざるを得ない。本質的には、彼らの理論全体を踏まえた上で、KMP に関連する部分を判断し抽出するべきであるが、今回は KMP の概要で示された、エフォートの対概念の基礎となった Darwin の考え方、及びエフォートシステムの基盤となる Laban の理論に焦点を絞り、KMP 理解を目的として以下にまとめることとする。

(1) Darwin

進化論で有名な Darwin は、身体表現の理論的研究の創始者とも言われている。彼は 1872 年に記した「人及び動物の表情について」の著作¹⁶⁾で、動物の表現行動の基本を攻撃または服従に二分した。相手が自分より弱ければ攻撃して相手を支配し、強ければ服従して生き延びる…このように動物の行動を捉えたものと思われる。さらに、人の基本的情動を7つに分類し、悲しみ、喜び、怒り、恐れ、軽蔑、恥、驚きに焦点を当て、これらの情動に見られる典型的な動きの様式^{註3)}を指摘した。

このような動物の表現行動の二分化や人の基本的情動の7分類については、現在では多様な捉え方があり、現在誰もが納得できるとは限らない。しかしながら 19 世紀においてすでに心の在り様が身体に表出されることを理論化していたことにより、後の Laban にも影響を与えたものと思われる。

(2) Laban

Laban の理論は世界各国で広がっており、国によって捉え方に差異が見受けられるが、ここではアメリカを中心として広がる理論を基盤としたい。彼は自身の運動分析理論(Laban Movement Analysis LMA)の中心に、以下に示す4つの項目ボディ (Body)、エフォート(Effort)、スペースハーモニー (Space Harmony)、シェイプ(Shape)を据えた。

① ボディ

ボディとはまさに身体そのもののことであり、人の動きを観察する際に、その人の身体のどの部位が動いているのかということを規定するために身体分割を行った。

② エフォート

力性(Weight)、空間(Space)、時間(Time)、流れ(Flow)の4要素から成る Laban 独自の動きの概念を表す専門用語であり、このエフォートによって、動く人間の心的態度を意味し、英語の本来の努力など

の意味とは全く異なっている。このエフォートの概念を理解するために、研究者たちは次のような捉え方をしている。

- ・動きが生起してくる内側からの衝動(神沢和夫 1985)
- ・舞踊における身体動作の特徴(中田亨 2007)
- ・動きを生み出す際に発揮される、いわば身体の「意思」(日下四郎 2006)

エフォートの4要素には、それぞれの対概念があり、戦いのような攻撃的なものと、屈服のような服従的に分けられる。この点が、前述の Darwin の動物の基本的表現行動を攻撃と服従に二分化したことに影響を受け、類型化したものと思われる。

動きの流れは、実際にはその動作の力加減や表現する場合の空間や時間の使い方に影響を受けることになる。動きが滑らかかぎこちないかは、こうした力性、空間、時間の3つのエフォートによって表現されるため、この流れの要素を除いた3つの要素を組み合わせ、基本の8つのエフォートが定められている(Table 4)。

Table 4. 基本の8つのエフォート

動き	力性	空間	時間	表現内容例
Thrusting	strong	direct	quick	目標に向かっていきなり攻撃する
Pressing	strong	direct	sustained	力を入れてぐっと押す
Slashing	strong	indirect	quick	やたらめったらに攻撃する
Wringing	strong	indirect	sustained	強くじわっと絞る
Dabbing	light	direct	quick	軽くペタペタと塗る
Gliding	light	direct	sustained	軽やかに一直線に滑る
Flicking	light	indirect	quick	軽く弾き飛ばす
Floating	light	indirect	sustained	ふわふわ軽やかに浮かぶ

*表内の表現内容例は、Newlove&Dalby¹³⁾を参照した。

③ スペースハーモニー

周囲の空間をどのように使っているのかという空間利用の性質のことを意味し、実質的には自身と空間との関係性を意味する。エフォートと同様に、ラバンの造語として Kinesphere (個人空間)を示すものである。多様な結晶体の中に人がいて、その中で人は多様な動きを行うことが述べられており、LMA の中では動きの12面体が有名である。その他の形も含め、ラバンが提唱した形には、4面体、立方体、8面体、10面体、12面体の5種類が存在する。

④ シェイプ

シェイプとは一般的には形を意味するが、LMA におけるシェイプとは、以下に示すような意味が込められている。

- ・シェイプとは全身的な幾何学的特徴を表すラバン独自の用語である。
- ・概念的にはエフォートの対立構造(攻撃と陶醉)を拡張した考え方である。
- ・具体的には人間の3次元空間構造をふまえ、前後・左右・上下のような空間に位置する面を命名し、それぞれに対照的な動きを当てはめている。
- ・シェイプの面には、前後にかかわる矢状面・左右にかかわるテーブル面・上下にかかわるドア面の3つがある。

前述のエフォートで示された運動の質的側面をふまえ、それらの動きがどのような形を作り上げるか、すなわちどのような空間に身体が位置付けられ、どのような空間利用を行っているかという観点に立ってシェイプが捉えられている。

このように KMP の考え方の基盤には、運動分析の専門知識が不可欠であり、これらを理解した上で、2つの分析のためのシステムに示された分析項目を読み取る必要がある。さらに、今回取り上げること

の出来なかった児童精神分析学についても、その理論的基盤の理解が求められている。

5. おわりにー評価法作成のための今後の課題

保育現場で保育者が子どもの動きの意味を理解し、理解を深めるために評価するということを目的に子どもの動きの評価法の理論的基盤としてKMPを検討してきた。今回KMPを概観しその理論的背景となっている運動分析理論や児童精神医学などの存在の大きさを改めて認識することとなった。実際は、その理論の複雑さや領域の幅の広さにある種の困難さを感じる場所である。

しかしながら同時に、心の在り様が筋緊張に表れることから理論的枠組みが作られたKMPを概観することによって、逆説的に捉えるならば筋緊張が解けた時の滑らかな動きの在り方が、今後注目点に値するものと思われる。すなわち、エフォートの要素で述べるならフローに該当する動きの流れにおける滑らかさである。こうした滑らかな動きは、動きそのものの巧みさにもつながっており、今後の検討課題は山積しているが、他者関係における動きの滑らかさをどのような視点で評価していくか、その要素を見いだすことが次の一歩へとつながるものと考えられる。

KMPそのものの現状を振り返ると、KMPの理解を促進するために、とりわけシステム1のテンションフローリズムに焦点を当て、これら動きの分類を図式化する試み¹⁷⁾も生まれている。さらに、Kestenbergと研究を共にしたダンスセラピストによるDVDの映像作成、ホームページからの学習なども少しずつではあるが可能となってきた。動きの評価の視点は、座学ではなく自ら動くことで理解が可能となるため、今後の課題としては、参与観察のような形式でKMPの実際に直接ふれることが求められよう。

さらに、欧米においてはダンスセラピー領域のみならず、医療、福祉、教育の分野で一部KMPが活用されている動きがある。このような他領域での応用の実態を探ることにより、日本の保育現場で汎用可能な子どもの動きの評価法開発につながるものと思われる。

註1) 大学院博士前期課程においてダンスセラピスト養成が行われているアメリカ、イスラエルなどでは、必修科目の中に動きの分析技法が含まれている。

註2) 2000年3月18日日本学術会議行動にて、日本学術会議健康・生活科学委員会健康・スポーツ科学分科会の主催で行われ、8月28日に提言書「子どもを元気にするための運動・スポーツ推進体制の整備」が発表された。

註3) ユング派のダンスセラピストであるChodorowは、その著作¹⁸⁾の中でDarwinの7つの情緒についてふれ、子どものダンスセラピーとの関連を述べている。

文 献

- 1) Kestenberg, J. & Sossin, M. The Role of Movement Pattern in Development, Dance Notation Bureau Press, pp.5-122 (1979)
- 2) Lewis, P. & Loman, S. ed., The Kesterberg Movement Profile Its Past Present Applications and Future Directions, Antioch New England Graduate School, pp.9-173 (1990)
- 3) Loman, S. & Foley, L, Models for understanding the nonverbal process in relationships, *The Arts in Psychotherapy*, 23 (4), pp.341-350 (1996)
- 4) Kestenberg-Amighi, J. & Loman, S., The Meaning of Movement Developmental and Clinical Perspectives of the Kestenberg Movement Profile, Amsterdam: Gordon and Breach Publishers, pp.1-307 (1999)
- 5) Chaiklin, S. & Schmais, C., The Chace Approach. Theoretical Approaches in Dance-Movement Therapy vol. I. Lewis, P. ed, Iowa: Kendall/Hunt publishing Company. pp.17-36 (1979)
- 6) Johnson, D. & Sandel, S., Structural analysis of group movement session: Preliminary research, *American Journal of Dance Therapy*, 1 (2), pp.32-46 (1977)

- 7) Schmais, C. & Diaz-Sakazar, P., BERN-A Method for Analyzing dance/movement therapy groups, *The Art in Psychotherapy* 25 (3), pp.159-165 (1998)
- 8) 大沼幸子, ダンス・ムーブメントセラピーにおける参加者の自己評価の試み, 第26回日本芸術療法学会抄録集(1994)
- 9) 崎山ゆかり, ダンスセラピーセッションにおける自己評価とその活用, 第29回日本芸術療法学会抄録集(1997)
- 10) 崎山ゆかり, ダンスセラピーにおける心とからだの連関—分析・評価・診断の前提条件として—, *ダンスセラピー研究*, 1 (1), pp.22-29 (2000)
- 11) Loman, S, & Merman, H. The KMP: A tool for dance/movement therapy. *American Journal of Dance Therapy*, 18 (1), pp.29-52 (1996)
- 12) Laban. R., *The Mastery of Movement*, Macdonald&Evans, pp.1-181 (1960)
- 13) Newlove & Dalby, *Laban for all*, Routledge, pp.1-245 (2007)
- 14) 大貫秀明, ムーブメントとダンスの知に照らす当今の教育環境—からだと学校を巡って—, 体育原理専門分化会キーノートレクチャー, (2003)
- 15) 大貫秀明, ~ラバンを「了解」するためのいくつかのヒント~, 第18回日本ダンス・セラピー協会大阪大会抄録集, p.11 (2009)
- 16) ダーウィン, 人及び動物の表情について, 浜中浜太郎訳, 岩波文庫復刻版, 岩波書店, pp.1-423 (1991)
- 17) Hastie, S. C., *The Kestenberg Movement Profile Color Wheel*, (ポスター製作) (1998)
- 18) チョドロウ, *ダンスセラピーと深層心理*, 平井タカネ監訳, 不昧堂出版, pp.64-70 (1997)